

氏名(生年月日)	伊 藤 景 一
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2377号
学位授与の日付	平成18年4月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	<b>Model specification and testing of outcome indicators used for assessment of healthcare service for home-care neurology patients</b> (在宅神経疾患患者に対するヘルスケアサービスの評価に活用するアウトカム指標の開発と妥当性の検証)
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第75巻 第12号 489-504頁 2005年
論文審査委員	(主査) 教授 岩田 誠 (副査) 教授 山口 直人, 宮崎 俊一

## 論文内容の要旨

### 〔目的〕

在宅ケアの質の測定はアウトカム評価に焦点が当てられているが、評価指標の多くは短期の在宅ケア用に開発されてきた。わが国のように神経疾患や脳血管障害を基礎疾患に持つ在宅ケア患者に対するケアの効果評価のためには、長期に渡る患者と家族のアウトカム指標を開発する必要がある。そこで、在宅神経疾患患者とその家族に対するヘルスケアサービスの効果評価に活用する、日常生活行動を遂行する上での困難度を基にしたアウトカム指標を開発した。さらに、開発した指標の信頼性、構成概念妥当性、および予測妥当性を検証した。

### 〔対象および方法〕

アウトカム指標開発のための追跡調査を2回実施した。ベースライン調査の解析対象者は、1995年4月から2000年3月までの5年間に大学病院神経内科を退院した463名であり、指標開発における対象者とした。その2年後にフォローアップ調査を実施し、回答が得られた201名を指標の妥当性検証における対象者とした。

アウトカム指標の開発手順は、日常生活行動を遂行する上での困難度を基に仮説的に5因子構造の指標項目を構成した。次に、共分散構造方程式モデリング(SEM)と一般線形モデルの手法を用いて、アウトカム指標の構成概念妥当性と予測妥当性を検証した。さらに臨床的関連性を基にアウトカム指標の利用可能性を評価した。

### 〔結果〕

アウトカム指標は25項目から成る5指標で構成された。SEMを用いて各指標を一次因子とし、上位概念に総合的アウトカム指標を仮定した二次因子モデルの成立の有無を検証した。モデルのパス係数、適合度指標ともに受入れ基準を満たした。各指標は、1. 疾病障害対処困難・不安指標、2. 家族介護負担・Strain指標、3. 運動機能不全指標、4. 身体症状発現指標、および5. 地域医療・ソーシャルネットワーク利用障害指標、と解釈された。各指標が在宅神経疾患患者における2年後の健康関連QOL(HRQOL)に及ぼす影響を、多重指標モデルを用いて検証した。5指標すべてが有意に2年後のHRQOLに影響を与えていたが、特に第1指標と第3指標からのパス係数の値が大きかった。2年間におけるアウトカム指標の改善の有無がHRQOLに与える影響をみた結果から、各アウトカム指標が影響を及ぼしているHRQOLの側面は異なることを見出した。特に、身体機能と役割機能のドメインにおいて、改善群と非改善群における差が大きいことを認めた。

### 〔考察〕

在宅神経疾患患者の2年間におけるアウトカム指標の改善率は26~40%、安定率は54~70%の範囲にあった。また、特に、疾病障害対処困難・不安指標と運動機能不全指標は在宅療養におけるHRQOLの多くの側面に関与することが示され、指標によるアセスメント結果を基にして、在宅ケア患者の心理社会的問題の抽出とケアサー

ビスの改善や新しいシステムの構築を図ることに寄与できると考えられた。

〔結論〕

開発したアウトカム指標は統計学的な妥当性検証結果から、在宅神経疾患患者と家族に対する長期間の在宅ケアサービスの効果評価への利用可能性を示した。

### 論文審査の要旨

本論文は神経疾患患者への在宅ケアの効果評価を行うために、日常生活行動の遂行上の困難度を基に長期に渡るアウトカム指標を開発し、共分散構造方程式モデリングを用いて指標の信頼性、構成概念および予測妥当性を検証した論文である。

アウトカム指標は、疾病障害対処困難・不安指標、家族介護負担・Strain 指標、運動機能不全指標、身体症状発現指標、地域医療・ソーシャルネットワーク利用阻害指標の5指標から構成された。2年間の各指標の改善率は26~40%、安定率は54~70%であった。また各指標が影響を及ぼしている健康関連 QOL の側面は異なることが示された。特に、疾病障害対処困難・不安指標と運動機能不全指標は在宅療養における健康関連 QOL の多くの側面に関与することが示唆された。

以上、本論文は開発したアウトカム指標による評価が在宅神経疾患患者の心理社会的問題の抽出と在宅ケアサービスの策定に有用であることを示した。

7

氏名(生年月日)	野 口 晶
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2378号
学位授与の日付	平成18年5月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	心尖部肥大型心筋症における左室内拡張期奇異性血流の経過観察
主論文公表誌	Journal of Cardiology 第47巻 第1号 15-23頁 2006年
論文審査委員	(主査) 教授 笠貫 宏 (副査) 教授 新田 孝作, 三橋 紀夫

### 論文内容の要旨

〔目的〕

心尖部肥大型心筋症は、おおむね予後良好な疾患であると認識されている。しかし、一部では左室内に収縮期加速血流を認め、さらに拡張期に心尖部から心基部に向かう左室内奇異性血流(paradoxical flow)を伴う症例を認め、これらで心尖部壁運動異常の増悪や心室頻拍などの合併症が高いとの報告が散見される。しかしながら、奇異性血流を有する症例の経過について検討した報告は少ないことから、今回われわれは外来での経過観察という視点から奇異性血流陽性例の経時的な変化を観察した。

〔対象および方法〕

心尖部肥大型心筋症の左室内心尖部の血流パターンを解析し、5年以上繰り返し心臓超音波検査を施行しえた29例を対象とし、壁運動異常の変化、心室頻拍や脳血管障害などの心血管系合併症の有無について経年的に評価した。奇異性血流の有無により、A群：観察開始時より奇異性血流を認める13例、B群：観察途中より奇異性血流を認めた8例、C群：経過中奇異性血流を認めない8例の3群に分け比較検討した。